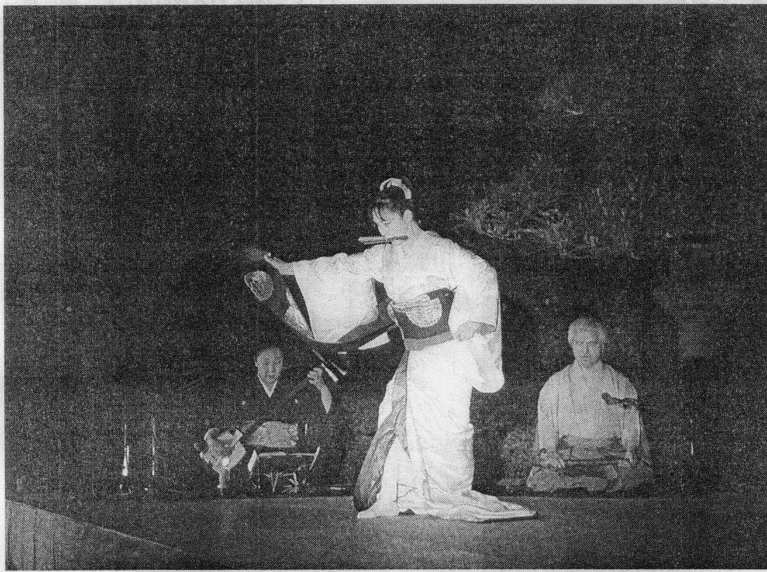


かれんな娘が破窓に狂い大蛇に変身していく物語を舞う古澤
侑章さん(鳳仙寺庭園で)



鐘で始まり、鐘で終わり

谷あいの新緑の庭園、池の上にしつらえられたどこにもない舞台。桐生市梅田町一丁目の鳳仙寺で27日、「地歌舞の世界」が繰り広げられた。同寺で舞を学ぶ「鳳の会」を指導している古澤侑章さんの公演で、本堂にぎっしり座った人たちは舞台と舞と、吹き渡る風や寺の鐘まで一体化した非日常の空間に酔いしれていた。

一陣の風も吹き荒れて

地歌舞は「上方舞」と

非日常の空間で

鳳仙寺で公演「地歌舞の世界」

も呼ばれ、歌舞伎とともに追って、大蛇(竜)に変に発達した舞台向きの江戸の踊りと区別される。観客と同じ座敷空間で舞うため、動きを抑えて、見る側は息遣いやすささげきなどの気配をも感じつつ、自分の胸の内を映して見ることができるといふ。古澤さんは家元の長女として7歳から舞い、古典はもちろん、さまざまな異分野とのコラボレーションにも取り組む。

山寺の鐘の音を台図に始まった公演は、富元清英さんの地歌と三絃に乗ってまず、ご祝儀曲とされる「鶴の声」が舞われた。続いて来ぬ人待つ女心をうたう「袖の露」。古澤さんのお話からは生まれ、吉岡龍見さんによる尺八独奏「鶴の巢籠」が響き渡った。

夜闇が迫るなか、後半はドラマチックな大作「古道成寺」。清姫が恋心を打ち明けたにもかかわらず、逃げた僧・安珍を

追って、大蛇(竜)に変身して川を渡り、鐘の中に隠れていた僧を焼き尽くすというストーリーで、怒り心頭し変身するまさにそのとき一陣の風が吹き荒れて、思いもよらぬ舞台効果となった。鐘の音で終演となり、観客たちは「すばらしい場だ、すべて満足ね」と語り合ったり、闇に沈む庭園をしばし眺めて余韻に浸っていた。

も呼ばれ、歌舞伎とともに追って、大蛇(竜)に変身して川を渡り、鐘の中に隠れていた僧を焼き尽くすというストーリーで、怒り心頭し変身するまさにそのとき一陣の風が吹き荒れて、思いもよらぬ舞台効果となった。鐘の音で終演となり、観客たちは「すばらしい場だ、すべて満足ね」と語り合ったり、闇に沈む庭園をしばし眺めて余韻に浸っていた。